

定例懇談会 平成元年 11 月 26 日（火）（14:20～16:45）

話題 : 「台湾・韓国・満州の 1 人旅(日本の統治時代の建物を訪ねて)」

報告者 : 秋口 守國

場所 : 建設コンサルタンツ企業年金基金会議室

台湾・韓国・満州の 1 人旅(日本の統治時代の建物を訪ねて)

0. はじめに

台湾は、台中(人口 274 万人)、嘉義、台南(189)、高雄(278)、台東、花蓮、基隆、台北(271)を、鉄道とバスを利用して一周してきました。

韓国は、釜山(756)、晋州(35)、全州(65)、扶余(郡人口7)、公州(11)、ソウル(1000)、水原(119)、安東(17)、慶州(26)、浦項(52)を全てバスで移動しました。

満州は大連(521)、ハルビン(994)、長春(756)、瀋陽(726)、撫順(218)、都市間移動は新幹線ないしは在来線特急を利用しました。

国内交通に関して現地で予約・切符の購入し移動、宿は事前にネットで鉄道駅、高速ないしは市外バスターミナルの近くを予約しました。人口は“地球の歩き方”から引用しました。

1. 日本の統治時代に残した施設など

・台湾で訪問したほぼ全ての都市において、日本統治時代の建物として、レンガ造、コンクリート・石造、木造が多く残されており、老朽したレンガ造などは補修しながらも磨き上げられ、木造についても何とかオリジナルを補強し、かつての設計を基本に建て替えが行なわれていて、都市内の大切なアクセントとして、また観光スポットに生かされていました。レンガ造やコンクリート造のものは、建設当時の市役所、警察などの行政関連施設や学校などが多く、今でもそのままの利用や内部を改装して美術館、博物館、文学館、記念講堂などに転用されています。これの前面には南国の大王椰子の並木が良く似合い、独特ののびやかな景観が美しい青空に映えていました。また、これ以外にも工場や倉庫など多方面にわたって賑わいを醸し出していました。木造建物群は、かつての雰囲気醸し出すことに留意され、保存・補修は難しいのですが老朽の程度により使える所はなるべく現物を使い、利用目的に応じて新たな建物を付加し、記念物として地域コミュニティ活動に使われており、また、観光スポットとして飲食店、土産物店など幾つかの群を形成していました。幾つかの場所では和服の貸し出しなどもあり、お互いにカメラを向けあったり、自撮り写真など賑やかに日本情緒を盛り上げ、果たしてここは何処と思わずにはいられません。

かつて台湾南部の広大な平野は塩害と水不足に悩まされており、日本統治時代に土木技術者である八田興一がダムと灌漑網の整備を考案しました。東大土木を卒業して間もなく、現地に赴き、1910年代に計画を立案、あまりに壮大な計画だったために事業化の承認を得られませんでした。その後日本国内で米騒動が起こり、この解決に資すると判断され急遽ゴーサインが出ました。1920年代に建設工事にかかり、苦難の末に1930年に完成、土木技術のみならず三圃式農業を推奨するなど経営の安定化を図り、下流域は緑の沃野に大きく変わり今でも多くの国民に感謝されています。

・残念ながら韓国国内には目ぼしい日本の史跡・痕跡はほとんど見られません、朝鮮戦争によりほぼ完ぺきに破壊されてしまったと言っても良いと思います。史跡として文禄・慶長の役でわずかな城もありますが、多

くは韓国側が建てたもので、ここには厳しい戦の様子と韓国がいかに苦しめられたかの解説版が掲げられていました。

ガイドブックで浦項の九龍浦近代文化通りは「かつて韓国人と仲良く暮らしてきた多くの日本人がいた」とあり足を延ばしました。通りを歩き、数人ですが女の子が浴衣がけで歩いていて微笑えましく、日本館(歴史館)にも入館、丁寧に日本語で説明をしていただき、「瀬戸内の漁師がやってきて沿岸漁業を起こし、賑わいをもたらして、きわめて貧しかった韓国人々にも衣食住を整え生活の楽しみをもたらした。」とお聞きして、当時の日韓の関係を理解したつもりでした。ただ、その道の先にある景観形成事業の説明板でいささか顔が引きつりました。要旨は「浦項市は家屋を整備することにより、日本の植民地時代の日本人の豊かな暮らしぶりを再生し、それとは反対に日本に搾取されていたわが民族のことを忘れないための教育の場として再整備する。そして都心活性化事業として第 2 回の景観大賞の最優秀賞を受賞した」と記されていました。ズワイ蟹などの生簀を並べた飲食店が多く立ち並ぶ表通りを歩き、これらの活気とは裏腹に、韓国に親近感を抱き続けてきた私の気持ちはずんと重苦しくなっていました。

・満州には、日本時代の主要な建物がかなり残り、時代感覚や由緒の良さなどを感じられますが、多くは現在市役所、裁判所や博物館など公的な利用がなされ、今や日本の匂いがかぐことはほとんど出来ません。これらの歴史的な建物には銘板がはめ込まれ”日本侵佔時期“などの文言は有りますが、省人民政府は全国重要文物保存単位、市政府は市級文物保存単位として歴史的な建物であることを示していました。道行く人も施設前を淡々と通り過ぎていくだけで、特段日本を意識などしていません、時折新婚の記念写真としてこれらの建物をバックに賑やかに撮影されていた程度、日本パッシングでしょうか。”日本人街の名残り“をなるべく訪ねましたが、ほとんど消滅ないしは建て替え中になっていました。これは過去を振り返るノスタルジアより経済のダイナミズムの中で更新されていると考える方が妥当です。

長春市はかつて新京と言われ満州国の首都、現在、偽満州国、英語で「操り人形」との訳、傀儡政権とされています。都市計画の立場から見ると、われらが先人たちは日本ではかなわなかったような新首都の都市計画を大胆かつ細心に描き、綿密な事業計画を立てて実現させていきました。そしてその都市遺産はしっかり地元根付き、南北に走る中央大街をはじめ骨太の道路網や、ゆったりとした緑・公園・水辺のネットワークなどがしっかりと中国人の手に引き継がれています。街中を流れる伊通河はこの貴重な財産の一つで、連続の河岸公園、緑は多く、水辺にも親しめるような工夫が随所に施され、都市内の公園も配置や規模などで計画的なおおいを感じ、われらが公園の大先輩佐藤昌さん達の努力の賜物です。

大連市で最高の史跡は、中心部の中山広場を囲み、当時の欧風の意匠も取り入れた最高の近代建築物群であり、旧大連市役所、旧横浜正金銀行大連支店、旧ヤマトホテルなどはガイドブックなどをご覧ください、今でも美しい植栽の広場を中心これらの建築物は中国人にとっても誇りのようです。これらの記念的な建物の後ろには 10 階程度、さらにその後 30 から 40 階の高層建築物が取り囲み、時代位相を実感しました。

・脱線ですが、美術館、博物館、各種史跡などの入場料は台湾、満州で無料のものも多く、またわが 74 歳のパスポートを提示することにより台湾では無料ないしは半額割引、満州は私が訪問した施設は全て無料でした。韓国は韓国人のみが高齢者割引と言われ、この恩恵はほとんどありません、他方、政治的な色彩の濃い施設は何処も無料でした。台中では、鏑木清方の春・夏・秋・冬の美人画や狩野派の立派な屏風など日本でもなかなか見る事のできない質も高い美術品を、ありがたく鑑賞させていただきました。

2. 歴史を振り返りつつ、現代を見る

・**台湾**は、国としての成り立ちは 17 世紀の明末から清の時代から出、それまでは原住民が夫々小さな地域を治めていました。日清戦争の後、清が負けたからと言って、何故日本の統治下に入らなければならないのかとのことで諍いは有りましたが、比較的穏やかに移行しました。第2次大戦中台湾では特段大きな戦闘行為もなく終戦に至り、規律ある日本統治の後に、中国本土で共産党との戦闘にやつれた蒋介石をはじめとする外省人がやってきてその支配に苦しみ、とうとう2. 28事件を起こし、その後、戒厳令は1987年まで続きました。ただ、内乱は大規模な戦闘行為にはならず、結果、日本統治時代の多くのハード施設はさほど傷つかずに残されました。

・**韓国**は半島に加えて中国東北部を活動領域とし、長くから連綿とした歴史が有り、常に中国の侵略や支配などの影響を強く受けながら、国内では小国分割や抗争などを繰り返し、自ら高麗や李氏の時代に国内統一もなされました。特に日本にとっては中国の高度な文芸・技術や知恵を韓国経由で学んできました。日本との関係では、660年白村江(韓国では白馬江)の戦いで、唐と連合した新羅に対し、百済と大和朝廷の連合軍は敗れました。1590年代豊臣秀吉の文禄・慶長の役では、日本は朝鮮半島全土を荒らし甚大な被害を与えました。城跡などの説明版にはこれでもかと言う位に、この役により韓国が苦しめられたことが記されていました。また良好な関係例としては、江戸時代に、釜山に日本の居留地が置かれ、朝鮮通信使などがあげられます。

明治維新後、日清・日露の戦いを経て、1910年に韓国は日本の統治下、植民地になり、当初は穏やかでしたが、時代は下り日華事変などを経て日本への同質化などかなり厳しくなりプライドの高い韓国の人々にとり、被害を受けた側で精神的に耐えらなかつた事でしょう。日本の敗戦により、朝鮮半島は独立の喜びに沸き立ちますが、米露の対決の高まり、38度線を境界として北と南に分割統治されました。南の韓国(大韓民国)は米国の支配下におかれ、円滑な統治を行うべく、米国や独立運動を介して日本に厳しい李承晩もかつての日本統治下での韓国人材やシステムなどを有効活用したようで、これらの人材が日本統治の延長である“親日”とされ、さらに軍事政権時代に続き、韓国の人々にとって日本とつながりを厳しくとらえる出発点になったと思われます。1950年から、一時停戦の動きも有りましたが、2年余にわたり抗争は続き、伴に後ろ盾を得て戦った朝鮮戦争で全土が荒廃し、日本統治時代の史跡を含め貴重な資産を多く失いました。

・今更、**中国、満州**の歴史を振り返っても皆様の方が良くご存知です。清朝以降、東北地方(満州)について振り返ると、満州族の故郷であり、ほかの王朝に比べ積極的に開発を進め瀋陽、吉林、チチハルを中核に、漢族の移住は禁止しましたがなし崩し的に増加しました。そして、19世紀後半欧米列強と競うように日本も積極的に進出、特に日露戦争の勝利により東清新鉄道の権益をロシアから受け地歩を固めていきました。辛亥革命、袁世凱の政権などにより国内軍閥による内乱が進み、満州では奉天系の張作霖が実権を握り、日本は満州事変を契機に満州帝国の設立の関与し、この後張学良などと対峙し種々権益確保に努めたが敗戦に至りました。終戦により蒋介石が統一を成功させたかに見えましたが、国共内戦により多くの戦死者や被害を生み、その後共産党の政権により開発と安定を目指しましたが、政治・経済運営のミスにより、様々な苦難が続きました。鄧小平の社会・市場主義政策により民生の安定が図られ世界第2位の経済大国にのし上がっています。この間種々の混乱はありましたが、日本の史跡は地域で枢要かつ公的な役目を担い、今でもその多くは立派に活用されています。

3. これから日本として考えておくこと

・3地域でお国柄は異なりますが、**都市インフラ**などはきちんと整備運営され、交通なども公的交通機関の導入も進み、ソフトや安全策も積極的に進めています。台湾は基本的に、無理な大規模化はせず、また歴史などを考慮しながら既存の建物を生かし段階的な手法を取り入れ整備しています。また市街地内では小河川の活用や緑地整備、斜面緑地を大切にしています。韓国も、今では増大する開発圧力を念頭に地域需要に応じて都市開発・更新などを含めて着実に進め、地方部も農業的な土地の高度利用も進め、総合的に経済力の強化が図られています。満州は新幹線や高速道路、高層住宅・ビルなどが規則正しく急ピッチで整備されている様は驚きですが、需給予測への考慮は乏しく、性急に大型事業を進めていて、今後いかに均衡を図れるか、強い危惧の念が湧きました。

・**台湾**は戦後飛躍的な成長を遂げ今や先進国の仲間入りです。ただ、中国との関係、一国2制度でおおいに苦勞しています、経済か自由化の選択です。私の滞在中に習主席は断固、核心的な権益である台湾は中国に組み込まれるべきとの演説があり、強い拒否反応が記事となりました。また、昨今の香港の犯罪者引渡し条例についての香港市民の抵抗に強い関心を示しており、いずれ令和2年の総統選挙で国民の意思が示される事になります。現在自由・平等・友愛の価値観を享受している台湾が簡単に放棄するとは思えませんが、経済権益についての強い要求もあり中国との連携を巡ってどう運営するのか、台湾の将来を決めるのは台湾の国民であり民主的な手続きの中で、しっかり判断してほしいものです。日本にとり基本的なスタンスを多く共有し、かつ、近年、大災害時での相互支援などを見ても、台湾との絆は極めて重要で幅広く支援を行いたいと考えます。

・**韓国**は、海外支援を得ながら漢河の奇跡と言う大成長を果たし、今や先進国の仲間入りです。ただ時の大統領により日本とのスタンスは微妙に変化し、今は北朝鮮との南北統一が大テーマですが、どのような統一の像やプロセスを取るのでしょうか、興味が尽きません。経済関係では中国依存が高まり、相対的に日本の位置づけや役割が下がり、国民性として、“恨”の強い意識のもとで日本との関係は常に何かささくれた微妙な間柄です。特に政権交代の折に、前政権の業績を見直す、“積弊清算”が浮上り国内ならいざ知らず、これを国際問題にも展開するのは常識的に無理があります。各地の史跡の歴史説明などで、かつての訪問時に比べ「日本の暴虐」というトーンがより強まったと感じました。日本は列強の帝国主義進出の時代、外交や法律・司法、教育制度などで欧米を参考にして進め、韓国における統治はお互いの習慣などを考慮して漸進的であり、特に李朝時代の両班制度のもとでの特権階級の支配から広く開放したことなど多くの効果が無視されています。私の目には実質的・物理的な被害規模は第2次世界大戦中と朝鮮戦争を比べ後者が桁違いに大きく、これは強国米露・中国の対立そして朝鮮内戦というカテゴリーの中で整理されたため、その扱いを年々小さくしたのでしょうか。他方、昨今の経済面で、財閥主導の韓国経済はもろい、最低賃金を上げ過ぎ若者の失業率が高く社会は安定していないなどの批判的な記事を目にしますが、韓国の底力はそんなに浅くないぞとも感じています。日本はお互いの持つ具体の事実を基礎にして、率直に言うべきことは言い、語り合い、そしてお互いに心を開きあうべきでしょう、物事には光と影があります、一方的な見解では解を導くことができません、残念！

・**中国**でプロパガンダとして広場、幹線道路、駅構内など至る所に習近平主席のスローガンやこれに係るイラストが掲げられています。テレビやインターネットなどの情報遮断など、外国人が客観的に見て、ジョージ・オウエンの“未来における情報管理社会”の一つの事例が、今正にここにあるのではないかと私は錯覚します。過去の政治的なマイナスの記述は影を消し、どこの博物館などで見かけません。中国国民の多くは政治より経済に重きを置き、現政権による行財政運営で年々豊かさの享受を評価しているのでしょう。厳しい

情報などの管理統制の中、外国から客観的なメッセージをいかに出せるのか、民主・自由の意義・価値観の再確認を期し、そのためには海外旅行をどんどん促すことが一番の早道なのかもしれません。他方、3年前広州駅周辺などで見た、武警、特警、公安、警察による厳重警戒に比べ、時点・場所の違いはありますが、ずっと穏やかでした。

・安東市の河回村(マウル)で偉人“柳成龍”の博物館を覗き、日本でも有名な李舜臣などの有能な武人を早くから見出し、彼らにその備えを命じました。また彼は日本の攻勢により王は退却しますが、「決して国境を越えてはならない、さすれば国民は王として認めなくなってしまう」と諫め、国内に留まったとの記述もありました。彼の記録に「朋党間の葛藤が大きくなるというのは末世を招き、国に危機を及ぼすと心配した、憂国衷情を垣間見る。」とあります。いづこの国・時代でも国を憂い、これに備え、行動する人がいれば危機を乗り越えられるものだと実感します。中長期的な展望を持ち、課題に対して逃げることなく果敢に対策を練って、実行に移していく姿の大切さを学ばざるを得ません。

・韓国の多くの史跡を見ていて、日本との戦いで死んだ韓国の人々を悼む気持ちとともに、大和の時代の防人や豊臣の時代に異国の地で死んだ武士たちの思い、その家族は何も知らされずに過ごさざるを得なかったのかをかみしめ、しみじみと涙がこみ上げてきました。それは太平洋戦争でも同じ、いづこの国にとっても戦いとは本当にむごいもので、この点から、戦後の70年余、日本は平和の維持という点では間違いなく合格でしょう。他方、平成の30年間、政治・経済などの点で各国との成長比較では著しく劣位にあり外交・政治・防衛など地政学的な発言力は低下が否めません。令和の時代、我々も大きな**変革を覚悟**しなければならないと思います。大きな公的な債務問題について経済学者をはじめ多くの識者が論じていますが、単純に考えれば、今の自分達の欲求を満たすがために借金を重ね、結果は次世代への贈り物にしていることは確かです。経済的に時代の流れに沿わず本来退場すべき幾つもの企業が退場せずに、新たな企業も起こりにくく、若者や挑戦者たちにチャンスを与え精神的にも支援すべきですが、高齢者たちは自らの生活に重点を置き過ぎ、若者や国の将来についての貢献を語ろうとしません、これでよいのでしょうか。我々は、前代から受け継いだものよりも良いものとして、これを次の世代に引き渡さなくてはなりません。例えば江戸時代の生活を頭に描き、循環型の身の丈に合った穏やかな仕組みを構築しつつ、若人達のチャレンジを積極的に応援出来る底力のある社会を組み立てていくのも一つの答えと考えます。 以上

参考まで	人口(百万人)	1人当たりGNI(千米ドル)	年間、国民の何分の1が訪日の人数*
台湾	23.4	23.3	国民の1/5(5人に1人訪日)
韓国	50.5	28.3	1/7
中国	1382	7.59	1/169
(満州)	108.6	—	—
香港	7	41.3	1/3
シンガポール	6	54.2	1/13
日本	126	37.7	—

原典;世界国勢図絵(2016・17)及び*は藻谷浩介氏の新聞記事(毎日新聞 2019. 1.20)から

参考書(◎は主たるもの、○は題名のみ)

◎ 2「アメリカの鏡・日本」ヘレンメアーズ著、伊藤延司訳

◎ 「日本の朝鮮統治を検証する」ジョージ・アキタ、ブランド・パーマー著、塩谷紘訳

◎ 1「CHINA2049」日経BP社

◎ 「図説台湾の歴史」周えんよう著、濱島敦俊訳

◎ 3「入門韓国の歴史」中学教科書版

○「中国の歴史1. 原始から春秋戦国」、「3. 魏晋南北朝」、「15. 年表・歴史地図・索引」

○「赤い帝国・中国の滅びる日」、「現代アジアの肖像3 張学良」、「中国人は本当にそんなに日本人が嫌いなのか」、

○「歴史と思想戦」、「韓洪九の韓国現代史」、「笑えるほどたちが悪い韓国の話」、「呆韓論」

○「地球の歩き方 台湾」、「韓国」、「中国」、「大連・瀋陽・ハルビン」

○「エリアスタディ台湾を知るための60章」、同様に「現代韓国」、「韓国の暮らしと文化」、「北朝鮮」、「現代中国」、「中国の歴史」など

○「満州国の首都計画」、「哈爾浜の都市計画」越澤 明著

・他に定期購読している「毎日新聞」のスクラップです。

注: 上記赤字印 ◎1は購入するなり、図書館で借りるなりして、ぜひ読んでみてください。

台湾・韓国・満州の1人旅（日本の統治時代の建物を訪ねて）

意見交換要旨

1・旅の概要として、建物の存在・保存の状態、活用のされ方で、第2次大戦後の政治環境で大きく異なる。台湾は蒋介石統治下で戒厳令などソフトな締め付けは厳しかったが、建物は多くが残り、なおかつ当初の目的とは異なるものもあるが、よく保存され、市民利用が活発になされている。韓国は、朝鮮戦争の影響でほとんどの建物が破壊され、見るべきものほとんどない。また日本に対して厳しい歴史的な認識のもと反日的な博物館などが新たに建てられていて寂しい思いをした。満州に於ける建物はかなり残り、かつ公的な施設として活用されているが、市民にとり日本とのかかわりを意識させるものは少なく、パッシングと言うイメージであった。

2・現下の厳しい日韓情勢から話題は政治問題の方に推移し、国内問題について、他の国からは口を出せない。しかし、お互いの理解を高めるためには相手の言い分をしっかりと把握しなければならず、歴史など共通認識の共有を目指し、地道に努力を重ねていかなければならない。ただ、個人旅行をすれば、どこの国でも親切・友好的であり、一部の偏った主張や報道に惑わされるべきではない。

3・第2次世界大戦に関して日本は果たしてしっかり戦争責任をアジアに語り、果たしてきたのか振り返る必要がある。例えば、戦争関連の文書や資料はことごとく廃棄されてしまい、振り返るには個人の日記に頼らざるを得ないとの事。これら文書管理あり方などは現在でも話題になってしまっている。一方で、東京裁判などは事後法（遡及法）で裁かれたりして妥当か、多くの識者たちは後付けの法制度によって裁かれるのは妥当かの議論がある。当時は共産主義の伸長、朝鮮戦争などが影を落としており、解決を急いだためだろうか。

4・台湾、韓国・満州の統治について、日本は植民地主義をとる欧米を範として、法制度、体制、手続きなどを整えていった。しかし、近隣の国々にとり、中国・韓国・日本の間では文化や技術の大きな・強い流れがあり、日本はアジアの仲間なのに、何故このような行動をとるのかとのいぶかしさを持っていたはず。日本の国内でもどのような統治をすべきか、政府・軍などで激しい議論があり、時代に応じた国民の強い声を基礎にその形が固まっていったはず。我々は謙虚にこのありさまを眺め現実を認識しつつも、未来志向で地政学や歴史をしっかり吟味し、考え・行動する必要があるようです。（文責：秋口）